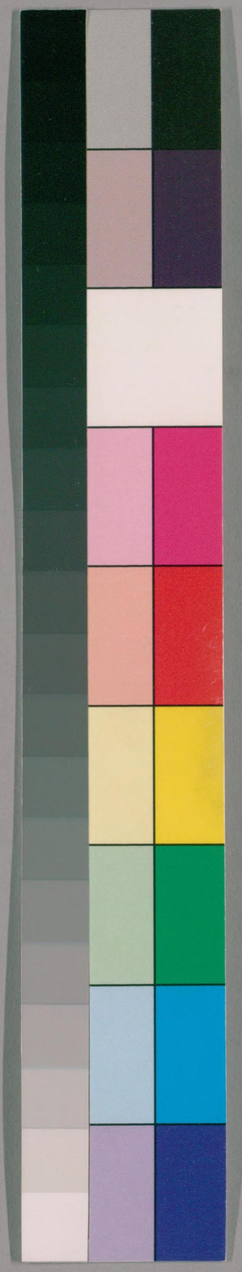
857
東京
55
取扱注意
函入



国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』 請求記号 857-55
ガラス使用

857-55

一 あやめとはあやなきことハ、かの善悪(ぜんあく)と
云ことハわかれずして善悪をもしら
ぬ也。此哥(うた)は前に五月の物の始ハ
あやめ草といひて郭公思ひそめし時ハ物の
わかちもしらずしてあやめもしらぬ恋をあやめ
もしらぬといふ也

二 菊をきゝによせて思ひを露の縁(えん)の
ことばにてよめり。あへずとハたへずといふ
心也。かくのごとくしてあへずといふをけぬべし
といふ詞(ことば)をそへたるなりと

三 上ハはやくといはん為の序(じよ)也。さて其心
はよしのゝ岩なみにつゝきて早くといふ也。
つれなく思ひそめし一念のおもひを人に
しられぬやうにおもひさだめし

四 白浪ハ跡なきといはんための風
によりて思ふ人のゆかりをしるべなりける

古今和歌集巻第十一

恋哥一

一 題しらず　よみ人しらず

郭公なくや五月のあやめ草あやめもしらぬ恋もするかな

二 素性法師

をとにのみきくの白露よるはおきてひるは思ひにあへずけぬべし

三 紀貫之

吉野川いはなみたかくゆく水のはやくぞ人を思ひそめてし

四 藤原勝臣

白浪の跡なき方にゆく舟も風ぞたよりのしるべなりける

帝國圖書館
帝國圖書館
志州 鍋屋 三ヶ所
国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』 請求記号 857-55
ガラス使用

ひろきうみにいでてはゆく人のしるべなき
大海の舟ハ風をたよりとするなり
恋ハたよりあるべしとなり
[五] おとは山ハつゝくをとにのみきゝてあふさかの関のこ
なたにゐて年をふるとの心ぞ
[六] 奥津白波たちかへりハ人に心をおくる
らしく思ふ人ハつれなくさりげなくして
こゝろもとなくおもひて思へハ
あはれなる事をおもひかへしてハ
とるやうに心をかくるにや
[七] 一たび見ぬ人ハ恋しからずとおもへハ
あやまる事なりけり
おもひ女をさして
右近の馬場ハ一条大宮之西にあり
ひをりの日とハ五月五日真手結
手結ハ五月三日六日之ひをりの日騎射

[八] 見ずもあらずとハかのすがたの見へしを云之
恋しくハとハかのおもかげのしたはしく思ふハら
ちらと見たるばかりに猶恋しく思ふ
のかくしのやうにハあやなくけふハくらしたる
あやなくけふハなかめくらすとハあやなく
あぢきなく也
[九] しるしらぬとハしるもしらぬも
ともに何かあやなくわきていはん
たゞ人しれぬ恋ハその心の
思ひこそしるべなれと也
春日祭ハ二月初申の日之
[十] 二月初申の日祭あり
雪のまをわけておひ出る草のはつかに見えし
君はもとよみし

風ぞたよりのしるべなりける
在原元方
[五] おとは山おとにきゝつゝあふさかの
関のこなたに年をふるかな
[六] たちかへりあはれとぞ思ふよそにても
人に心をおきつしら波
貫之
[七] 世中はかくこそありけれ吹風の
めに見ぬ人も恋しかりけり
右近のむまばのひをりの日むかひに
たてたりける車のしたすだれより女の
かほのほのかに見えければよむて
つかはせりける
在原業平朝臣
[八] 見ずもあらず見もせぬ人の恋しくは
あやなくけふやながめくらさん
返し　よみ人しらず
[九] しるしらぬなにかあやなくわきていはん
思ひのみこそしるべなりけれ
春日のまつりにまかれりける時に物見に
いでたりける女のもとに家をたづ
ねてつかはせりける
壬生忠岑
[十] 春日野の雪まをわけておひいでくる

草のはつかに見えし君はも
人の花つみしける所に
まかりてそこなりける
人のもとにのちによみて
つかはしける　貫之

十一 山桜かすみのまよりほのかにも
見てし人こそこひしかりけれ

もとかた

十二 たよりにもあらぬおもひのあやしきは
心を人につくるなりけり

凡河内躬恒

十三 はつかりのはつかにこゑをききしより
中空にのみ物を思ふかな

貫之

十四 あふ事は雲ゐはるかになる神の
音にききつつ恋ひわたるかな

よみ人しらず

十五 かたいとをこなたかなたによりかけて
あはずはなにを玉のをにせん

十六 夕ぐれは雲のはたてに物ぞおもふ
あまつ空なる人をこふとて

十七 かりこものおもひみだれて我こふと
いもしるらめや人しつげずは

十八 つれもなき人をやねたくしらつゆの
おくとはなげきぬとはしのばん

十九 ちはやぶる賀茂の社のゆふだすき

十一 詞書よ人を桜によそへて読る
ところなれハいつくるともおもはするやうに
ほのかにも見てし人こそと言つゞけ
しとそ

十二 あれハたよりにもあらてある
我おもひハ頼て思ふ人を思ふハ我か
心のあやしきそ

十三 この歌ハはつかにきゝて中空
ニ思ひもえあつまり思ひのこがるゝ事を
云ふすして思ひハ中空なるものを
思ひのやるかたなき心を云ふとにたる
よりハ声をきくハはつかなることを詠
ミてとたるとて中で思ひ
とのへそ

十四 雨ふりて[illegible]
へき事ともえあハずしてのこゝろ
のしらるゝるきことも[illegible]集よ
八雲中のことを思ひてとあり

十五 かたいとハよりかけてあはすと
ことさらに[illegible]ハ[illegible]の
ことをいふにや命ハ[illegible]といふ[illegible]の
とハかくいふよりえん[illegible]

十六 夕ぐれのくれくれと[illegible]のくれくれに
まつとまてりてさすらへて[illegible]
しかたなき人ハ[illegible]ものうき
ことそ

十七 かりこもハみだれていはんためのかり
こもハ[illegible]といはんとハ
言ふて[illegible]とみへし

十八 つれなき人とやねたくしら露
のおくとハなげき[illegible]思ひ[illegible]数
きえぬとハ[illegible]しのびて[illegible]

十九 ちはやぶる　ゆふだすきハ[illegible]

三十 [illegible]は毎日[illegible]

[illegible]

三十 思ひの二天にみちぬらんといふ[illegible]

[illegible]

三十一 海の[illegible]浪のたゝぬ日[illegible]

三十二 序歌[illegible]

三十三 こゝろれて人しれ[illegible]
山下水のたきつ[illegible]

三十四 岩きりとほし[illegible]
恋はしぬとも[illegible]

三十五 [illegible]
[illegible]淵瀬[illegible]

ひとゝせを君か代の[illegible]

二十 我恋はむなしき空にみちぬらし
思ひやれともゆくかたもなし

二十一 するかなる田子の浦浪たゝぬ日は
あれとも君をこひぬ日そなき

二十二 夕月夜さすやをかへの松の葉の
いつともわかぬ恋もするかな

二十三 足曳の山した水のこかくれて
たきつ心をせきそかねつる

二十四 吉野川いはきりとほし行水の
をとにはたてし恋はしぬとも

二十五 滝つせの中にもよとはありてふを
なと我恋の淵瀬ともなき

[illegible]我思ひは[illegible]

三十六 山[illegible]
[illegible]

三十七 思ひ[illegible]
[illegible]

三十八 末つむ花は紅の[illegible]
[illegible]

三十九 [illegible]花[illegible]
[illegible]

三十 [illegible]梅の[illegible]
[illegible]

三十六 山たかみしたゆく水のしたにのみ
なかれてこひん恋はしぬとも

三十七 思ひいつるときはの山の岩つゝし
いはねはこそあれ恋しき物を

三十八 人しれす思へはくるし紅の
末つむ花の色にいてなん

三十九 秋の野のおはなにましりさく花の
色にや恋ん逢よしをなみ

三十 わか園の梅のほつえに鶯の
ねになきぬへき恋もするかな

四十一 あしひきの山郭公わかことや
君に恋つゝいねかてにする

四十二 夏なれは宿にふすふる蚊遣火の
いつまて我身下もえをせん

ゆくあきをおしむこころ

三十一　人ごとにをしむ秋ぞはかなきを　郭公
とまらでとしもへぬべし

三十二　おりつれば袖のしらつゆ吹きこして
ゆくあきかぜをとどめてぞきく

三十三　ひぐらしのなきつるなへにおのれさへ
ものがなしきにかへるやまかぜ

三十四　人のみるめをこそつつめおほかたは
わがこえなくにあきかぜぞふく

三十五　ふくからにあきのくさきのしをるれば
むべやまかぜをあらしといふらむ

三十六　ふきまよふこのしたかぜはふきとめむ
ちるもみぢばをあきのかたみに

三十七　あきのいろのくさにもきにもうつろへば
つらきものとてあきかぜぞふく

三十八　人もをし人もうらめしあぢきなく
よをおもふゆゑにものおもふみは

三十九　思ふことなどてふことをかしそめて
よよのこころを人にたがへむ

四十　ゆくみづとわかばのうへにおくつゆと
いづれかさきにきえむものぞと

四十一　ゆくみづにかずかくよりもはかなきは
思ひかけぬをおもふなりけり

四十二　いつまでかのべのまつをひきてみむ
わがよのほどのありかぎりして

四十三　ゆくすゑはかたみにせむとおもふらむ
いまのこころのうれしかるらむ

四十四　あふことをいつをいつまでかぎりにて
わがこころをばなぐさめてまし

四十五　あふことをいつをいつまでかぎりにて
わがこころをばなぐさめてまし

てうかこころつくし

三十九　人よりもうとくもあるかつきのかげ
うとしといへばさすがにぞみる

四十　そとのもにかきねをせばみ月のかげの
あるをもしらでとふ人ぞうき

四十一　そとのもにかきねをせばみ月のかげの
あるをもしらでとふ人ぞうき

四十二　ゆく
ゆくとみてたれのさとまでかへるらむ
あふことのなきはかりにて

四十三　ゆく
ゆくとみてたれのさとまでかへるらむ
あふことのなきはかりにて

四十四　ゆく
ゆくとみてたれのさとまでかへるらむ
あふことのなきはかりにて

四十五　ゆく
ゆくとみてたれのさとまでかへるらむ
あふことのなきはかりにて

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

四十六 [illegible]

四十七 [illegible]

四十八 [illegible]

四十九 [illegible]

五十 [illegible]

五十一 [illegible]

四十六 [illegible]

四十七 [illegible]

四十八 [illegible]

四十九 [illegible]

五十 [illegible]

五十一 [illegible]

五十二 [illegible]

五十三 [illegible]

五十四 [illegible]

五十五 [illegible]

五十六 [illegible]

五十七 [illegible]

五十八 [illegible]

五十二 [illegible]

五十三 [illegible]

五十四 [illegible]

五十五 [illegible]

五十六 [illegible]

五十七 [illegible]

五十八 [illegible]

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

[五十九] 春霞たなびく山の桜花うつろはむとや色を増すらむ

[六十] 春霞色の千種に見えしより人の心ぞのどけからぬ

[六十一] 鶯の谷より出づる声なくは春来ることを誰か知らまし

[六十二] 梅の花匂ふ春べは百鳥の声も香も同じ心なりけり

[六十三] 春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るる

[六十四] 梅の花たが袖ふれしにほひぞもとの主やわすれぬと思へば

[六十五] 人の家に梅の花を見てよめる

[六十六] 春の夜の夢ばかりなる手枕に かひなく立たむ名こそ惜しけれ

[六十七] 花の色は雪にまがひて見えずとも香をだにぬすめ春の山風

[六十八] 雪の木に降りかかれるを見てよめる

[六十九] 春来ては花とぞ人の見るべきを 降りかかるとは目こそ知らね

[七十] 題しらず

[七十一] 春ごとに花の盛りはありなめど あひ見むことは命なりけり

[七十二] 花の散るを惜しむ心はありながら 風に先立つ我ぞわびしき

[七十三] 山桜我見にくれば春霞 己れ先立ちて立ちかくすらむ

[七十四] 春霞たなびきにけり久方の 月の桂も花や咲くらむ

[七十五] 春霞たなびく山の桜花 うつろはむとや色を増すらむ

[七十六] 春霞色の千種に見えしより 人の心ぞのどけからぬ

[七十七] 鶯の谷より出づる声なくは 春来ることを誰か知らまし

[七十八] 梅の花匂ふ春べは百鳥の 声も香も同じ心なりけり

[七十九] 春の夜の闇はあやなし梅の花 色こそ見えね香やは隠るる

[八十] 梅の花たが袖ふれしにほひぞも 主やわすれぬと思へば

[八十一] 人の家に梅の花を見てよめる

[八十二] 春の夜の夢ばかりなる手枕に かひなく立たむ名こそ惜しけれ

[八十三] 花の色は雪にまがひて見えずとも 香をだにぬすめ春の山風

[八十四] 雪の木に降りかかれるを見てよめる

[八十五] 春来ては花とぞ人の見るべきを 降りかかるとは目こそ知らね

[八十六] 題しらず

[八十七] 春ごとに花の盛りはありなめど あひ見むことは命なりけり

[八十八] 花の散るを惜しむ心はありながら 風に先立つ我ぞわびしき

[八十九] 山桜我見にくれば春霞 己れ先立ちて立ちかくすらむ

[九十] 春霞たなびきにけり久方の 月の桂も花や咲くらむ

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

三 我によりつゝきなれハさめさらまし
もみえつらん人をねとこそしらて

二 うたゝねにみしハ見るかたへ人をまつ
みてのまちしんく

三 いとせめてハ切なる事也夜の衣
をかへしてねれハ恋しき人を夢
にみるといへり

四 身にさむきハ秋風の身にしむ也
くるゝよことにちきりし人の
つれなきハなしかなしさをいふ
あかつきハさ人のさとにかよふ
いもつゝもと寺ハ京有所八田野ニ在之
導師と云リ高僧ハ下ニ法ヲ説キ

古今和歌集巻第十二

恋歌二

題しらす　小野小町

一 思ひつゝぬれはや人の見えつらん夢としりせはさめさらましを

二 うたゝねに恋しき人を見てしより夢てふ物はたのみそめてき

三 いとせめて恋しき時はむはたまの夜の衣をかへしてそきる

素性法師

四 秋風の身にさむけれはつれもなき人をそたのむくるゝ夜ことに

下つゐつも寺に人のわさしける日真静法師の導師にていへりける言葉を歌によみて小野小町かもとにつかはせりける　安倍清行朝臣

あり人のかきハ逝たる人の事なり
同しく衣裏の宝珠と譬し
たりとも也

五 白玉のこかくしとくるゝ人
とらぬなミたの涙なりと見とる
つゝまぬなみたをくゝりを

六 返し

五 つゝめとも袖にたまらぬ白玉は人を見ぬめの涙なりけり

返し　小町

六 おろかなる涙そ袖に玉はなす我はせきあへすたきつせなれは

寛平御時后宮歌合のうた　藤原敏行朝臣

七 [illegible]

八 [illegible]

九 序 [illegible]

十 [illegible]

十一 [illegible]

十二 [illegible]

十三 [illegible]

十四 序 [illegible]

十五 [illegible]

十六 [illegible]

十七 [illegible]

十八 [illegible]

十九 [illegible]

二十 [illegible]

二十一 [illegible]

二十二 [illegible]

二十三 [illegible]

二十四 [illegible]

二十五 [illegible]

二十六 [illegible]

二十七 [illegible]

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

十八 かるのねのわかくさまつとしをへば
君がよろづの数にこそ入れ

十九 君がよはいくちよやちよさざれいしの
いはほとなりてこけのむすまで

二十 玉垂のをすのすだれをかけてだに
つれなき人のこころをぞみる

二十一 君が世は幾千代やちよ白雲の
たえてつきせぬ峰の松風

二十二 滝川の岩波清くとどろくは
池に心を洗ふなりけり

二十三 春日野の若紫のすりごろも
しのぶの乱れかぎり知られず

二十四 春ごとに花のさかりはありなめど
あひ見むことは命なりけり

二十五 春霞たなびく山の桜花
うつろはむとや色を変ふらむ

二十六 ときはなる松のみどりも春来れば
今ひとしほの色まさりけり

二十七 春雨の降るは涙か桜花
散るを惜しまぬ人しなければ

二十八 花の色は雪にまがひて見えずとも
香をだにぬすめ春の山風

二十九 春風の花を散らすと見る夢は
覚めても胸のさわぐなりけり

三十 山高み人もすさめぬ桜花
いたくな散りそ峰の白雲

三十一 春ごとに流るる河を花とみて
折らでぞ過ぐる人のをもなき

三十二 春の夜の闇はあやなし梅の花
色こそ見えね香やはかくるる

三十三 花の香を風の便りにたぐへてぞ
匂はしやれる袖に移さむ

三十四 花の色は移りにけりないたづらに
わが身世にふるながめせしまに

三十五 わが宿の花見がてらに来る人は
実のなる果ぞ無事なかりける

三十六 色よりも香こそあはれと思ほゆれ
誰が袖ふれし宿の梅ぞも

三十七 梅の花立ちよるばかり匂ひたる
あやなく人をとがめつるかな

三十八 梅の花にほふあたりは夏衣
たたむをうしと思ふべらなり

三十九 五月待つ花橘の香をかげば
昔の人の袖の香ぞする

四十 ほととぎす鳴くや五月のあやめ草
あやめも知らぬ恋もするかな

四十一 ほととぎす鳴きつる方をながむれば
ただ有明の月ぞ残れる

四十二 ほととぎす鳴きつる声のなごりさへ
聞きがたくなる夜半の月かな

四十三 ほととぎす鳴きつる方を眺むれば
ただ有明の月ぞ残れる

四十四 ほととぎす鳴きつる声のなごりさへ
聞きがたくなる夜半の月かな

四十五 ほととぎす鳴くや五月のあやめ草
あやめも知らぬ恋もするかな

四十六 五月待つ花橘の香をかげば
昔の人の袖の香ぞする

四十七 梅の花立ちよるばかり匂ひたる
あやなく人をとがめつるかな

四十八 梅の花にほふあたりは夏衣
たたむをうしと思ふべらなり

四十九 春の夜の闇はあやなし梅の花
色こそ見えね香やはかくるる

五十 花の香を風の便りにたぐへてぞ
匂はしやれる袖に移さむ

五十一 花の色は移りにけりないたづらに
わが身世にふるながめせしまに

五十二 わが宿の花見がてらに来る人は
実のなる果ぞ無事なかりける

五十三 色よりも香こそあはれと思ほゆれ
誰が袖ふれし宿の梅ぞも

五十四 梅の花立ちよるばかり匂ひたる
あやなく人をとがめつるかな

五十五 梅の花にほふあたりは夏衣
たたむをうしと思ふべらなり

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

三十七　河そひの柳をよめるうた
三十八　春雨をよめるうた
三十九　ふるさとの花をよめるうた
三十　山のさくらをよめるうた

三十一　我やどの花ををしむうた
三十二　文屋朝康
三十九　秋ふかくなるほどをよめるうた
三十　忠岑
凡河内躬恒
清原深養父

三十三　秋の夜をよめるうた
三十四　人ならばいかにうるさくあらましを物いはぬ木にはなにをかはせん
三十五　ひさかたのつきのかつらもあきはなほもみぢすればやてりまさるらん
三十六　秋の野をよめるうた
三十七　秋の野のおばながうへにおく露を玉にぬかんと思ふ人たれ
三十八　秋の田のほとりをよめるうた
三十九　我ころもつゆにぬれつつあきの田のかりほにあれば
四十　秋のうたとてよめる
四十一　秋風にあふたのみこのしほやかれなばこひしからんかも
四十二　秋のうたとてよめる
四十三　わがやどの菊ふく風のにほひこそ秋のふかくはなりぬべらなれ
四十四　秋のうたとてよめる
四十五　秋萩をよめるうた
四十六　秋萩をよめるうた
四十七　秋萩をよめるうた
四十八　秋萩をよめるうた
四十九　秋萩をよめるうた
五十　秋萩をよめるうた
五十一　秋萩をよめるうた
五十二　秋萩をよめるうた
五十三　秋萩をよめるうた
五十四　秋萩をよめるうた
五十五　秋萩をよめるうた
五十六　秋萩をよめるうた
五十七　秋萩をよめるうた
五十八　秋萩をよめるうた
五十九　秋萩をよめるうた
六十　秋萩をよめるうた
六十一　秋萩をよめるうた
六十二　秋萩をよめるうた
六十三　秋萩をよめるうた
六十四　秋萩をよめるうた
六十五　秋萩をよめるうた
六十六　秋萩をよめるうた
六十七　秋萩をよめるうた
六十八　秋萩をよめるうた
六十九　秋萩をよめるうた
七十　秋萩をよめるうた
七十一　秋萩をよめるうた
七十二　秋萩をよめるうた
七十三　秋萩をよめるうた
七十四　秋萩をよめるうた
七十五　秋萩をよめるうた
七十六　秋萩をよめるうた
七十七　秋萩をよめるうた
七十八　秋萩をよめるうた
七十九　秋萩をよめるうた
八十　秋萩をよめるうた
八十一　秋萩をよめるうた
八十二　秋萩をよめるうた
八十三　秋萩をよめるうた
八十四　秋萩をよめるうた
八十五　秋萩をよめるうた
八十六　秋萩をよめるうた
八十七　秋萩をよめるうた
八十八　秋萩をよめるうた
八十九　秋萩をよめるうた
九十　秋萩をよめるうた
九十一　秋萩をよめるうた
九十二　秋萩をよめるうた
九十三　秋萩をよめるうた
九十四　秋萩をよめるうた
九十五　秋萩をよめるうた
九十六　秋萩をよめるうた
九十七　秋萩をよめるうた
九十八　秋萩をよめるうた
九十九　秋萩をよめるうた
百　秋萩をよめるうた

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

三十五 [illegible]

三十六 [illegible]

三十七 [illegible]

三十八 [illegible]

三十五 [illegible]

三十六 [illegible]

三十七 [illegible]

三十八 [illegible]

三十九 [illegible]

四十 [illegible]

四十一 [illegible]

四十二 [illegible]

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

四十二 何ごとのおはしますをば知らねどもかたじけなさに涙こぼるる

四十三 ちはやぶる神の斎垣もこえぬべし恋しき時は道まどふまで

四十四 思ひいづるときはの山のほととぎす唐紅の血の涙こそ

四十五 思ひやる心はかねてゆきぬらし

四十六 雪

四十七 袖のうへに降りしく雪を払ひつつ恋ひこそわたれ逢ふよしもがな

四十八 かきくらし降りくる雪の空にのみ消えつつ物を思ふころかな

四十九 名にしおはば逢坂山のさねかづら人に知られでくるよしもがな

五十 音にきく高師の浜のあだ波はかけじや袖のぬれもこそすれ

五十一 忘れ草我が紐につく時ぬれど恋ひたる人のしるしなければ

五十二 我が恋は知る人もなしせく床の涙しらずも雨の降るらん

五十三 我が袖にまだらに雪のふりかかるは白玉つくる人やたれ

五十四 春たてば花とや見まし白雪のかかれる枝に鶯の鳴く

五十五 梅の花それかあらぬか春霞たちかくすべき匂ひなれば

五十六 我が宿の花見がてらに来る人は千代ふるためしもてきたれり

五十七 ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらん

五十八 久方の光のどけき春の日に静心なく花の散るらん

五十九 ひとはいさ心もしらず故郷は花ぞ昔の香に匂ひける

六十 年ふれば齢は老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし

六十一 花の色は霞にこめて見せずとも香を誰かは尋ねざらまし

六十二 山高み人もすさめぬ桜花いたくな散りそ峰の白雲

六十三 春ごとに花の盛りはありなめど逢ふ事かたき青柳の糸

六十四 春雨の降るは涙か桜花散るを惜しまぬ人しなければ

六十五 花の色はうつりにけりないたづらに我が身世にふるながめせしまに

六十六 花ざかりにて京を見てよめる

六十七 年ごとに見る者ながら山ざくら思ふごとなき物にぞありける

六十八 山ざくらわが見に来れば春霞峰にもをにも立ちかくしつつ

六十九 見渡せば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける

七十 花の木も有らじと思へば山風に我が身をさへぞ任せつるかな

七十一 吹く風を勿来の関と思へども道もせに散る山桜かな

七十二 吉野山こぞの枝折の道かへてまだ見ぬ方の花を尋ねん

七十三 山桜咲きそめしより久方の雲ゐにのみも見ゆる頃かな

七十四 ほととぎす鳴くや五月のあやめ草あやめも知らぬ恋もするかな

七十五 五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする

七十六 ほととぎす我が待つ山に来て鳴けど我が思ふ人は来ずてすぎつつ

七十七 ほととぎす鳴きつる方をながむれば唯有明の月ぞ残れる

七十八 ほととぎす鳴きつる声のなごりにはあやめぞ人の袖にかかれる

七十九 ほととぎす鳴きつる方をながむれば唯有明の月ぞ残れる

八十 ほととぎす鳴きつる声のなごりにはあやめぞ人の袖にかかれる

八十一 ほととぎす鳴きつる声のなごりにはあやめぞ人の袖にかかれる

八十二 ほととぎす鳴きつる声のなごりにはあやめぞ人の袖にかかれる

八十三 ほととぎす鳴きつる声のなごりにはあやめぞ人の袖にかかれる

八十四 ほととぎす鳴きつる声のなごりにはあやめぞ人の袖にかかれる

八十五 ほととぎす鳴きつる声のなごりにはあやめぞ人の袖にかかれる

八十六 ほととぎす鳴きつる声のなごりにはあやめぞ人の袖にかかれる

八十七 ほととぎす鳴きつる声のなごりにはあやめぞ人の袖にかかれる

八十八 ほととぎす鳴きつる声のなごりにはあやめぞ人の袖にかかれる

八十九 ほととぎす鳴きつる声のなごりにはあやめぞ人の袖にかかれる

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

[illegible]

五十四 [illegible]

五十五 [illegible]

五十六 [illegible]

五十七 [illegible]

五十八 [illegible]

五十九 [illegible]

六十 [illegible]

六十一 [illegible]

六十二 [illegible]

六十三 [illegible]

六十四 [illegible]

六十五 [illegible]

六十六 [illegible]

六十七 [illegible]

六十八 [illegible]

六十九 [illegible]

六十一 [illegible]

六十二 [illegible]

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

[十三]
そうくして年ふるあをねうりぬとそれうりにはかへよ
年ふるまつとあやまたつな

[十四]
年やはるくとかへりをかへりみるこゝろをいつちやりてとあくきやりてうちをあふきつゝかくんよりて秋の
のふるれはねのかんとこゝろそうちそへてやふよと

[十五]
ちはやふる神のいかきもこえぬへしいまはかきりの
あふさかの関

[十六]
年やとあるしらすもあらすもあるよそふるまつとぬるよとしらなん

[十七]
年やとあるしらすもあらすもあるよそふるまつとぬるよとしらなん

[十八]
なし

[十九]
雨のそうふりくるこゝろ

[二十]
ふる郡にて人をまつとはなしに雨の降くるにぬれてこそきつ

[二十一]
古今和歌集巻第十三 終

[二十二]
雑体

[二十三]
やまひのうちにてよめる

[二十四]
ひとりのみながめてふれはわかそてのつゆさへ袖にうつりけるかな

[二十五]
ものおもふときくにはあらしふくからにあきのこのはのちるにやあるらん

[二十六]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[二十七]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[二十八]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[二十九]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[三十]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[三十一]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[三十二]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[三十三]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[三十四]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[三十五]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[三十六]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[三十七]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[三十八]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[三十九]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[四十]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[四十一]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[四十二]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[四十三]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[四十四]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[四十五]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[四十六]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[四十七]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[四十八]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[四十九]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[五十]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[五十一]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[五十二]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[五十三]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[五十四]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[五十五]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[五十六]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[五十七]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[五十八]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[五十九]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[六十]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[六十一]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[六十二]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[六十三]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[六十四]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[六十五]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[六十六]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[六十七]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[六十八]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[六十九]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[七十]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[七十一]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[七十二]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[七十三]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[七十四]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[七十五]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[七十六]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[七十七]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[七十八]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[七十九]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[八十]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[八十一]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[八十二]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[八十三]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[八十四]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[八十五]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[八十六]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[八十七]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[八十八]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[八十九]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[九十]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[九十一]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[九十二]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[九十三]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[九十四]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[九十五]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[九十六]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[九十七]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[九十八]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[九十九]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百一]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百二]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百三]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百四]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百五]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百六]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百七]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百八]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百九]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百十]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百十一]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百十二]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百十三]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百十四]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百十五]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百十六]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百十七]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百十八]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百十九]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百二十]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百二十一]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百二十二]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百二十三]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百二十四]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百二十五]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百二十六]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百二十七]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百二十八]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百二十九]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百三十]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百三十一]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百三十二]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百三十三]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百三十四]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百三十五]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百三十六]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百三十七]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百三十八]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百三十九]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百四十]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百四十一]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百四十二]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百四十三]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百四十四]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百四十五]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百四十六]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百四十七]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百四十八]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百四十九]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

[百五十]
ものおもへはさわのほたるもわかみよりあくかれいつるたまかとそみる

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

二 なかなかを面とはみるへうすくを
しいつゝ思ひと打絶ぬつゝいとく
海もまさらさまゝ神のぬるゝなり
とことわきまして あゝよ人きと之
色あにも面のことハなし

三 思ひの源原に源をよるへき
人之身さへなるの何出去之云云

四 よるへなるとハよるゝある程之
さまとも我ハ君かかゝをとゝなれ
ぬとゝ

五 明之けてハ明るを又明るとてハ
行とゝ

六 あゝぬ君のつりれともきゝ
やうてゝ君のことゝなるハきゝぬる

二 つまきくゝ乃なかゝ名にまきさる潤川
神乃ゝぬまとてくあふりしとなし
かゝ女にかりまそくをしとよ
らみゝる

なるまひ乃名
三 あさゝ君さゝて神ハひつゝ名潤川
身さへなるかゝきゝ人たゝまん
見らゝ よゝ人志ゝす

四 よるへなるゝ身後さゝてとをくなるゝ
きとゝ
五 さゝ後ハ君か新となるまきさ
ゝ
いたつゝ人ゆ見てゝきぬるゝ物ゆへ
ゝ
六 あゝぬ君乃ふる白雪と積つゝる

車あるへきをとゝ

七 篠にけし神とハさしハ寝とこ
なれやまきゝ物なれハよせらりそまし
よりとも程ゆゝて明る君ハぬれまさ
なとゝ

八 見るゝ名とハ人のとひきゝ
まゝゆゝまして明しるゝかゝあゝぬハ
まの人ゝしきまゝあるゝ人なるよ
ゝゝあるとハ志ゝてゝひゝくなるん
とゝ

九 人の詳人行てあゝて明るんゝ志
あゝくきゝまゝるゝと君もなしく
ハなるゝさゝくゝとなるへきとめんゝ

我さゝへ共ゝ妻ぬへきゝとゝ
此音ハある人乃ゝ行ゝ柿本人
麻呂なるゝ

七 秋乃野にさゝしゝあさゝ乃袖
あゝくさしゝくゝひちまきゝ

八 見るゝめる程ゝ乃ゝ衛とゝ志ゝ
かまきゝるゝあまゝ此見ゝ
源ふ二ノ名

光孝ノ帝子是忠親王ノ男人

九 あゝすしゝくこまひあをなハまゝの
なゝくや人をつゝしと思ふん

十一 [illegible]

十二 [illegible]

十三 [illegible]

十四 [illegible]

十五 [illegible]

十六 [illegible]

十七 [illegible]

十八 [illegible]

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55

ガラス使用

十七 明之

十八 悪ひくきなれと悪しさの切は如何ハ多くはしらぬ事を心のとれ月の見しさるましまやうくゆくりしよりそへて以ハ事又云うかまと出てうんもあるを

十七 人志まきぬ我かよひちれ関ハ
よひくことにおもふ孫なんん
葉原 鈴木

十八 悪ふまきと悪し記時ハ事しハ乃
心よりまて月乃出てくまそくれ
よ見人志しら寸

十九 悪くそ稀にこよひそおもふ乃
中ふつまるハ多くはもあらなん
小野小町

二十 秋乃夜も名のわかるとおもふ
ことそ花なくあまぬる夜成
凡河内躬恒

二十一 もし花思ひそいらくぬ方ゆるを
あふ人がしら乃秋の夜なれハ
よ見人志しら寸

二十二 志れしかれかしくと明日をハ
とれかきぬくなるそ絶しき
藤原くにつ[illegible]鈴木
中納言長帰江男く

二十九 明之は[illegible]

二十 ことそことなくとハ何なるを
いひかなとたなく秋のなり紀秋も
ましかれとと

二十一 ひとりねよのがき夜を思ひ
しらしに今ゆひぬれハ明やすき
そ人がらをかごつまてよもべし

二十二 かうし朝と思ふまさうれかひ
そうたり夜ゆるの事なりし志きり
ますり物思ひやるへし

三百 今はのんどにやりてうえ
き時えひもあらんとねんごろにいひもあ
りて思ひもあらぬ事のいでくるをば別の
事にて思ひたつてやみぬるなり

三百四 あふ事をたえてしのぶのみだれ
きかみだれそめにしわれならなくに
もとよりの事

三百五 題しらず

三百六 都をば霞とともにたちしかど
きぎすの声をいかにまちきて
おきてこしいりぬる後の心地のさ後は
叶ふるを二声きてあるべきよふもあ

三百七 あまのかるもにすだく虫の
われからとねをこそなかめ
世をばうしとやいふべき

三百八 あきかぜにあふたのみがたき
かげ見えてつゆのいのちをなにまつ
よるべき

三百九 都をば霞とともにたちしかど
秋風ふくになるかりがねぞきく

三百十 ゆく蛍雲のうへまでいぬべくは
秋風ふくと雁に告こせ

三百十一 秋風にあふたのみがたき
人の身をわが思ふ時はいかにとかせむ

三百十二 秋風にあふたのみがたき
世なれどもつれなき人をうらみつるかな

三百十三 あまのかるもにすだく虫の
われからとねをこそなかめ
世をばうしとやいふべき

三百十四 あきかぜにあふたのみがたき
かげ見えてつゆのいのちをなにまつ
よるべき

三百十五 都をば霞とともにたちしかど
秋風ふくになるかりがねぞきく

三百十六 ゆく蛍雲のうへまでいぬべくは
秋風ふくと雁に告こせ

三百十七 秋風にあふたのみがたき
人の身をわが思ふ時はいかにとかせむ

三百十八 秋風にあふたのみがたき
世なれどもつれなき人をうらみつるかな

三百十九 猿丸大夫

奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の
声きく時ぞ秋はかなしき

三百廿 題しらず

三百廿一 ちはやぶる神代もきかず
竜田川からくれなゐに水くくるとは

三百廿二 秋の田のかりほの庵の苫をあらみ
わが衣手は露にぬれつつ

三百廿三 題しらず

三百廿四 秋の田のかりほの庵の苫をあらみ
わが衣手は露にぬれつつ

三百廿五 題しらず

三百廿六 ちはやぶる神代もきかず
竜田川からくれなゐに水くくるとは

三百廿七 奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の
声きく時ぞ秋はかなしき

三百廿八 題しらず

三百廿九 猿丸大夫

奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の
声きく時ぞ秋はかなしき

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

文德の皇女姞子内親王の此時懷
胎して侍ると師尚と云是葉
平子の云る間茂範為[illegible]
人やすんなりてとハさすもなきと

三十
[illegible]

三十一
親しき人のやうにまとひのき[illegible]
現ハ世人さかりとく裏の流ハ[illegible]
なに処ハ中原之世の人ハまゐせさらハ
何れ[illegible]ハいりし程あらゆく

三十二
うハ玉ハ花間に[illegible]あらく[illegible]のうに
あひてしきしく裏に云一切
世間ハ[illegible]現くうる[illegible]にかりて
[illegible]

三十三
[illegible]

三十四
[illegible]

三十五
[illegible]

三十六
[illegible]

三十七
[illegible]

三十八
[illegible]

三十九
[illegible]

三十
[illegible]

三十一
[illegible]

三十二
[illegible]

三十三
[illegible]

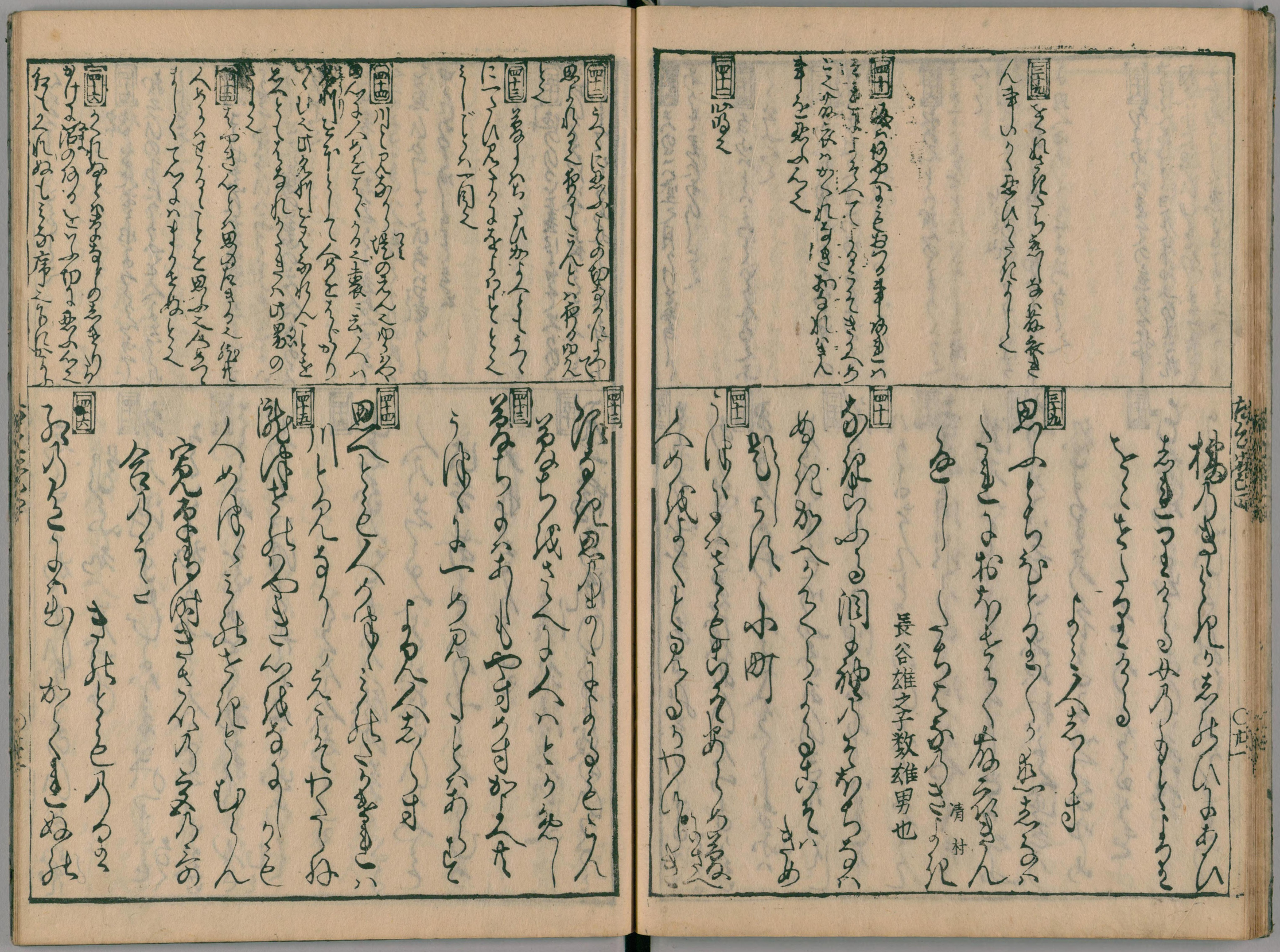
三十四
[illegible]

三十五
[illegible]

三十六
[illegible]

三十七
[illegible]

三十八
[illegible]



長谷雄之子数雄男也

清村

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

しもにかよひてこひはしぬとも
題しらす　みつね
⦅四十七⦆ 冬の池にすむにほとりのつれもなく
そこにかよふと人にしらすな
⦅四十八⦆ さゝの葉にをくはつしもの夜をさむみ
しみはつくとも色にいてめや
⦅四十九⦆ 山しなのをとはの山の音にたに
人のしるへくわかこひめかも
よみ人しらす
此哥ある人あふみのうねめのとなん申す
清原深養父
⦅五十⦆ みつしほの流ひるまをあひかたみ

見るめのうらによるをこそまて
平貞文
⦅五十一⦆ 白川のしらすともいはしそこきよみ
流て世々にすまんとおもへは
友則
⦅五十二⦆ 下にのみこふれはくるし玉の緒の
たえてみたれん人なとかめそ
⦅五十三⦆ わか恋を忍ひかねてはあしひきの
山橘の色に出ぬへし
よみ人しらす
⦅五十四⦆ 大かたはわか名もみなとこきいてなん
世をうみへたにみるめすくなし
平貞文

⦅四十七⦆ 冬池　我名の水そこにかくれかねて
我思ひのそこにかよふを人にしられ
しとそ
⦅四十八⦆ さゝは霜[illegible]の夜にしみて[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
⦅四十九⦆ 音に人のしるへきほとの[illegible]
[illegible]
[illegible]
中にあらはれしと云
⦅五十⦆ 逢の時[illegible]
[illegible]
[illegible]

⦅五十一⦆ 人にはかくれ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
⦅五十二⦆ [illegible]
[illegible]
[illegible]
⦅五十三⦆ 山橘[illegible]
[illegible]
⦅五十四⦆ [illegible]
[illegible]
[illegible]

五十五　花のころをしうく思ひわたるくらしつるかな
ね涙のせきあへぬなり

五十六　序

ぬくるつゆしもこもれるとも思ひけむ
こゝろし人にをりてをくらむ

五十七　序

ふるとしに春立ちけるとも思ひけむ
こゝろし人にをりてをくらむ

五十八　春

ふれとしにまたるゝものは鶯の
こゑとさゝがきのみかは

五十九　春

かすみたちこのめもはるの雪ふれば
花なきさとも鳥ぞなくなる

六十　春

ふるさとは雪のみ花にまがひつゝ
ひとこそ見ねとかひもありけり

六十一　春

春ごとにながるゝ河を見てしかな
うつもれ木の花さくといふを

六十二　春

花ちらす風の宿りは誰か知る
我にをしへよ行きてうらみむ

六十三　春

風ゆゑに思ひみだれて花の
しづ心なくも我はなるかな

六十四　春

人もをし山もかすめる世なれども
かくてもあるものは春の花

六十五　春

ひさかたの光のどけき春の日に
しづ心なく花のちるらむ

六十六　春

あすもこむ野とも山とも思はぬに
かすみへだてゝ遠くもあるかな

六十七　春

ちりぬとも香をだにのこせ梅の花
こひしき時のかたみにもせむ

六十八　春

梅の花たちよりぬひのしるければ
あるじは誰と問はずもあらなん

六十九　春

梅がかをそでにうつしてとゞめてば
年をへてこそ花はかたみに

七十　春

ちる花をしがらみとゞめかねつれば
春のみ山ぢかひなかりけり

伊勢

日 序 ○ 花薗人をえらばすと
ふ事を ○ 花薗人をえらばすと
ふ事を

日 ○ 花薗人をえらばすと
ふ事を

日 序 ○ 花薗人をえらばすと
ふ事を

四 ○ 花薗人をえらばすと
ふ事を

日 ○ 花薗人をえらばすと
ふ事を

四 ○ 花薗人をえらばすと
ふ事を

日 ○ 花薗人をえらばすと
ふ事を

四

十一 ふるさとの花をたづぬる春ごとに
あるじしられぬ香ぞ袖にしむ

十二 花をこそ春のしるしと思ひしか
化けいづるものとは知らざりき

十三 ふるさとの花のあるじや問はれまし
をりしも人のたづねきたりて

十四 ふるさとの花のあるじや問はれまし
きかぬ日ぞなき世の中にして

十五 ふるさとの花のあるじや問はれまし
かくてのみやは春を過ぐすと

十六 ふるさとの花のあるじや問はれまし
ものもいはずなりにしものを

十七 ふるさとの花のあるじや問はれまし
かりそめの旅寝とぞ思ふ

十八 ふるさとの花のあるじや問はれまし
狐狸の住みかとなりて

十九 ふるさとの花のあるじや問はれまし
いさ知らず昔の人のふるさとに

二十 ふるさとの花のあるじや問はれまし
春の夜の月

二十一 ふるさとの花のあるじや問はれまし
三輪の山もと

二十二 月やあらぬ春や昔の春ならぬ
わが身ひとつはもとの身にして

二十三 月やあらぬ春や昔の春ならぬ
やとるふるさと

二十四 月やあらぬ春や昔の春ならぬ
なみだの川に身なげしも誰

二十五 月やあらぬ春や昔の春ならぬ
かこち顔なる我が涙かな

二十六 月やあらぬ春や昔の春ならぬ
我が身ひとつの秋にはあらねど

二十七 月やあらぬ春や昔の春ならぬ
我が身ひとつはもとの身にして

二十八 月やあらぬ春や昔の春ならぬ
恋しき人は来ぬ夜なりけり

二十九 月やあらぬ春や昔の春ならぬ
泣けと言ふばかりに鳴くか

三十 かきくらす心の闇にまどひにき
ふるさとの人もおもほえず

三十一 かきくらす心の闇にまどひにき
夢うつつとは世人さだめよ

三十二 かきくらす心の闇にまどひにき
夢かうつつか寝てかさめてか

三十三 なほ残る雪と花とを見るからに
いづれを春と分くべきにもあらず

三十四 思ひきや深草の里をこえぬべき
我が身ひとつの秋にはあらねど

三十五 思ひきや深草の里をこえぬべき
恋しき人は来ぬ夜なりけり

三十六 思ひきや深草の里をこえぬべき
泣けと言ふばかりに鳴くか

三十七 思ひきや深草の里をこえぬべき
かこち顔なる我が涙かな

三十八 思ひきや深草の里をこえぬべき
なみだの川に身なげしも誰

三十九 思ひきや深草の里をこえぬべき
月やあらぬ春や昔の春ならぬ

四十 思ひきや深草の里をこえぬべき
やとるふるさと

四十一 思ひきや深草の里をこえぬべき
小倉山嶺のもみぢ葉心あらば

四十二 思ひきや深草の里をこえぬべき
いさ知らず昔の人のふるさとに

四十三 思ひきや深草の里をこえぬべき
春の夜の月

四十四 思ひきや深草の里をこえぬべき
三輪の山もと

四十五 思ひきや深草の里をこえぬべき
わが身ひとつはもとの身にして

四十六 思ひきや深草の里をこえぬべき
恋しき人は来ぬ夜なりけり

四十七 思ひきや深草の里をこえぬべき
泣けと言ふばかりに鳴くか

四十八 思ひきや深草の里をこえぬべき
かこち顔なる我が涙かな

四十九 思ひきや深草の里をこえぬべき
なみだの川に身なげしも誰

五十 思ひきや深草の里をこえぬべき
月やあらぬ春や昔の春ならぬ

五十一 思ひきや深草の里をこえぬべき
やとるふるさと

五十二 思ひきや深草の里をこえぬべき
小倉山嶺のもみぢ葉心あらば

五十三 思ひきや深草の里をこえぬべき
いさ知らず昔の人のふるさとに

五十四 思ひきや深草の里をこえぬべき
春の夜の月

五十五 思ひきや深草の里をこえぬべき
三輪の山もと

五十六 思ひきや深草の里をこえぬべき
わが身ひとつはもとの身にして

五十七 思ひきや深草の里をこえぬべき
恋しき人は来ぬ夜なりけり

五十八 思ひきや深草の里をこえぬべき
泣けと言ふばかりに鳴くか

五十九 思ひきや深草の里をこえぬべき
かこち顔なる我が涙かな

六十 思ひきや深草の里をこえぬべき
なみだの川に身なげしも誰

六十一 思ひきや深草の里をこえぬべき
月やあらぬ春や昔の春ならぬ

六十二 思ひきや深草の里をこえぬべき
やとるふるさと

六十三 思ひきや深草の里をこえぬべき
小倉山嶺のもみぢ葉心あらば

六十四 思ひきや深草の里をこえぬべき
いさ知らず昔の人のふるさとに

六十五 思ひきや深草の里をこえぬべき
春の夜の月

六十六 思ひきや深草の里をこえぬべき
三輪の山もと

六十七 思ひきや深草の里をこえぬべき
わが身ひとつはもとの身にして

六十八 思ひきや深草の里をこえぬべき
恋しき人は来ぬ夜なりけり

六十九 思ひきや深草の里をこえぬべき
泣けと言ふばかりに鳴くか

七十 思ひきや深草の里をこえぬべき
かこち顔なる我が涙かな

七十一 思ひきや深草の里をこえぬべき
なみだの川に身なげしも誰

七十二 思ひきや深草の里をこえぬべき
月やあらぬ春や昔の春ならぬ

七十三 思ひきや深草の里をこえぬべき
やとるふるさと

七十四 思ひきや深草の里をこえぬべき
小倉山嶺のもみぢ葉心あらば

七十五 思ひきや深草の里をこえぬべき
いさ知らず昔の人のふるさとに

七十六 思ひきや深草の里をこえぬべき
春の夜の月

七十七 思ひきや深草の里をこえぬべき
三輪の山もと

七十八 思ひきや深草の里をこえぬべき
わが身ひとつはもとの身にして

七十九 思ひきや深草の里をこえぬべき
恋しき人は来ぬ夜なりけり

八十 思ひきや深草の里をこえぬべき
泣けと言ふばかりに鳴くか

八十一 思ひきや深草の里をこえぬべき
かこち顔なる我が涙かな

八十二 思ひきや深草の里をこえぬべき
なみだの川に身なげしも誰

八十三 思ひきや深草の里をこえぬべき
月やあらぬ春や昔の春ならぬ

八十四 思ひきや深草の里をこえぬべき
やとるふるさと

八十五 思ひきや深草の里をこえぬべき
小倉山嶺のもみぢ葉心あらば

八十六 思ひきや深草の里をこえぬべき
いさ知らず昔の人のふるさとに

八十七 思ひきや深草の里をこえぬべき
春の夜の月

八十八 思ひきや深草の里をこえぬべき
三輪の山もと

八十九 思ひきや深草の里をこえぬべき
わが身ひとつはもとの身にして

九十 思ひきや深草の里をこえぬべき
恋しき人は来ぬ夜なりけり

九十一 思ひきや深草の里をこえぬべき
泣けと言ふばかりに鳴くか

九十二 思ひきや深草の里をこえぬべき
かこち顔なる我が涙かな

九十三 思ひきや深草の里をこえぬべき
なみだの川に身なげしも誰

九十四 思ひきや深草の里をこえぬべき
月やあらぬ春や昔の春ならぬ

九十五 思ひきや深草の里をこえぬべき
やとるふるさと

九十六 思ひきや深草の里をこえぬべき
小倉山嶺のもみぢ葉心あらば

九十七 思ひきや深草の里をこえぬべき
いさ知らず昔の人のふるさとに

九十八 思ひきや深草の里をこえぬべき
春の夜の月

九十九 思ひきや深草の里をこえぬべき
三輪の山もと

百 思ひきや深草の里をこえぬべき
わが身ひとつはもとの身にして

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

十九 見てしかがとハ見たくおもふて也 山がつのかきほにさける大和なでしこハ いとしき人をなでしこにたとへて思ふこゝろ也

二十 津の国のなにハといはん為の序也 とはにハとこしなへといふ事也 思ハずハ難波の事をバおもはずして山しろのとはにあはん事をのみ思ふ也

二十一 しき嶋のやまとにハあらぬ唐衣とハ 衣ハ比とも書てころもへずしてといはん為也

二十二 恋しとハたが名づけけるぞ 死ぬとバかりいふべき事也

二十三 見よしのゝ大川のべの藤なみとハ 並に思ハゞといはん為也

二十四 かく恋ひん物とハ我も思ひにき 心のうらとハ心のうらなひ也

二十五 此歌ハ陽成院の御乳母の歌也 ことしき中をばさくる物かハ

二十六 梓弓ハひくといはん為也 ひきのハ大和の国の名所也 このうたハある人あめのみかどの近江の采女にたまひけるとなん

二十七 糸ハくりかへしといはん為也 この歌ハかへしによみてたてまつりけるとなん

十九 あな恋し今も見てしか山がつの かきほにさける山となでしこ

二十 津の国のなにハ思はず山しろの とはにあひ見んことをのみこそ

貫之

二十一 しき嶋のやまとにハあらぬから衣 ころもへずしてあふよしもがな

深養父

二十二 恋しとハたが名づけけん事ならん しぬとぞたゞにいふべかりける

二十三 見よしのゝ大川のべの藤なみの なみに思はゞわが恋ひめやハ

二十四 かく恋ひん物とハ我も思ひにき 心のうらぞまさしかりける

二十五 天の原ふみとゞろかしなる神も 思ふ中をばさくる物かは

二十六 梓弓ひきのゝつゞら末つひに 我思ふ人にことのしげけん

このうたハある人あめのみかどの近江のうねめにたまひけるとなん申す

二十七 夏びきのてびきの糸をくりかへし 事しげくともたえんと思ふな

この歌ハかへしによみてたてまつりけるとなん

三十四　世のつねの人の別れを言ふもくちをしかりしものの
かなしきときはやとものうらやましきのみぞ

三十五　ありわびぬ

三十六　くらくとも歎くな人を待つ山のふもとの草のつゆの
命ぞ

三十七　人の身も我も草葉の露なれや逢ふ事かたみ袖ぬらすらん

三十八　白露の色はひとつをいかにして秋の木の葉を千々に染むらん

三十九　ちはやぶる神代も聞かず竜田川からくれなゐに水くくるとは

四十　おく露の風に乱るる白菊は散りてのみこそ人に知られめ

四十一　ちはやぶる神の斎垣も越えぬべし恋しき人のまもりなければ

四十二　我が恋は知る人もなしせく床の涙しらずも流れ出にけり

四十三　我が袖は草の庵に宿かりて枕さだむる程もなきかな

四十四　秋風に山とぶ雁もつらねたり我が思ふ人は離れ行くとも

四十五　風をいたみ岩打つ波のおのれのみくだけて物を思ふころかな

四十六　我が背子が衣の裾の吹き返しうらめづらしき秋の初風

四十七　我が宿の萩の下葉も色づきぬ来ぬ人を待つ虫の声する

四十八　秋萩の枝もたわわに置く露を消たずて玉に貫く人もがな

四十九　秋萩の下葉色づく今よりや来ぬ人待つと我が身こがれん

五十　おく露の色はわかねど秋萩の下葉からくもなりにけるかな

五十一　我が宿の秋萩すすき打なびき我が恋しきを知る人もなし

五十二　秋萩の枝もとをにおく露の消ぬべき恋も我はするかな

五十三　我が宿の秋萩すすき散りにけり来ぬ人待つと月をながめて

五十四　我が宿の秋萩すすき散りにけり来ぬ人待つと月をながめて

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用

さしてこゝと聞ゆるによりて人のうへを

三十五 いでその人はことはかりよくて實なし うつし心とは移て人の心もかはるといへり つき草の色のうつりやすきにたとへたり

三十六 今の世は偽おほくてこそ人のことのはもうれしからね 偽なき世ならはいかはかりうれしからんと也

三十七 いつはりと思ひなからも今さらに誰をかまことゝ思ひてたのまんと 人のことはのいつはりを思ひて我はたのまんかたなきと 思へり

三十八 秋風に木の葉のうつろふことく人の心もうつろひやすしといへり

三十九 蝉の声をきゝて夏衣のうすきをおもひ 人の心のうすくならんことをなけきて 思ひつゝけたる也

四十 世の人ことのしけけれは わすれぬものゝかれぬへきと 歎きたる也

四十一 そのあかぬ中をはなれなは それをたにのちの忘れかたみとせんと 也

四十二 忘なんと思ふ心のつくから ありしよりもまさりて恋しきと也

四十三 郭公は秋にはなかぬ物なれは 人の秋にあはんとする心にたとへて よめり

四十四 人の心よとむ事あらは

三十四 …たゝこゝにしもねたる聲する

三十五 いで人はことのみぞよき月草の
うつし心は色ことにして

三十六 偽のなき世なりせばいかばかり
人のことの葉うれしからまし

三十七 いつはりと思ふものから今さらに
たがまことをか我はたのまん

素性法師

三十八 秋風に山の木のはのうつろへば
人の心もいかゞとぞ思ふ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

とものり

三十九 蝉の声きけばかなしな夏衣
うすくや人のならんと思へば

四十 うつせみの世の人ごとのしげければ
わすれぬもののかれぬべらなり

四十一 あかでこそ思はん中ははなれなめ
そをだにのちの忘れがたみに

四十二 わすれなんと思ふ心のつくからに
ありしよりけにまづぞこひしき

四十三 わすれなん我をうらむな郭公
人の秋にはあはんともせず

四十四 たえずゆくあすかの川のよどみなば
心あるとや人の思はん

〔七百卅〕人にあふべき時はひものとくと云り めづらしき人と云は我のたのむ人也 またみえぬ人をやみんとやしかもせぬといひて わがしたひものとけわたるといへり ひものとくる事也

〔七百卅一〕かげろふとは蜻蛉とかけり あるかなきかの物也 こゝろはかげろふのそれかあらぬかといへるは 袖ぬるゝといふ所 八袖ぬらしてなげくと云心也

〔七百卅二〕堀江こぐとは難波の堀江也 たなゝしをぶねこぎかへりとは おなじ人にや恋わたりなんといへる心也 [illegible]

〔七百卅三〕わたつみとは [illegible] 袖やあはとうきなんといへり

〔七百卅四〕いにしへになほたちかへるとは [illegible] 家の人のなかにあるを [illegible]

うつろはんとは思ほえなくに

よみ人しらず

〔七百卅〕めづらしき人を見むとやしかもせぬ
わがしたひものとけわたるらん

〔七百卅一〕かげろふのそれかあらぬか春雨の
ふる日となれば袖ぞぬれぬる

〔七百卅二〕ほりえこぐたなゝしをぶねこぎかへり
おなじ人にや恋わたりなん

伊勢

〔七百卅三〕わたつみとあれにし床をいまさらに
はらはゞ袖やあはとうきなん

貫之

〔七百卅四〕いにしへになほたちかへる心かな

〔七百卅五〕[illegible] 人の心かはる [illegible]

〔七百卅六〕この歌はまへのおとゞ [illegible] 人のふみを返しける [illegible] 思ひてわすれぬ [illegible]

恋しきことに物わすれせで

人をしのびにあひしりてあひがたくありければ その家のあたりをまかりありきける折に かりのなくをきゝてよみてつかはしける

大伴黒主 家持五代之孫

〔七百卅五〕思ひいでゝ恋しき時ははつかりの
なきてわたると人しるらめや

右のおほいまうちきみすまずなりにければ
かのむかしおこせたりける文どもを
とりあつめてかへすとてよみておくりける

こしへまかりける人によみてつかはしける
三七十　紀利貞
かへる山ありとはきけと春霞たちわかれなは恋しかるへし
三七十一　人のむまのはなむけにてよめる　貫之
をしむからこひしき物を白雲のたちなむのちはなに心ちせむ
三七十二　友のあつまへまかりける時によめる　在原滋春
わかれてはほとをへたつと思へはやかつみなからにかねてこひしき
三七十三　あつまの方へまかりける人によみてつかはしける　いかこのあつゆき
おもへとも身をしわけねはめにみえぬ心を君にたくへてそやる

中納言源のゝほるの朝臣のあふみのすけに侍ける時よみてやれりける
閑院
三七十四
あふさかの関しまさしき物ならはあかすわかるゝ君をとゝめよ
三七十五　題しらす　よみ人しらす
から衣たつ日はきかしあさ露のおきてしゆけはけぬへきものを
三七十六　ひたちへまかりける時にふちはらのきみとしによみてつかはしける
寵

三七十　[illegible]
近院ハ[illegible]文徳天皇子之右大臣[illegible]
三七十一　略之
三七十二　[illegible]唐に錦[illegible]
三七十三　[illegible]
是ハ離別の男之
三七十四　[illegible]本錦[illegible]
三七十五　あれてとかくの[illegible]
三七十六　[illegible]

六十七 そこにおかくよりもあのこしは
あそれはえ何しに掛らんとえ

六十八 人はあふまでの形なんにせよとて
こそをきこつれとのんえ

もは裏え

六十七 おかれ何ゝは悪し見人乃かたちんりは
物そふことにまかゝらるゝらん
よろん人志しす

六十八 何ふまでくの乃かたことも我なるはちんに
ゆくくもあらぬ乃なくさ海なるに
相や乃まとろまきる人乃むす
めに以とも志乃ひに何ひてく物
以ひきるゆひこに相や乃ふ
とれひまきはいそ見かへる
とくこと我なんぬ見をきこく
以るまに来るそれちことをか
へすとくとかゝる
奥風

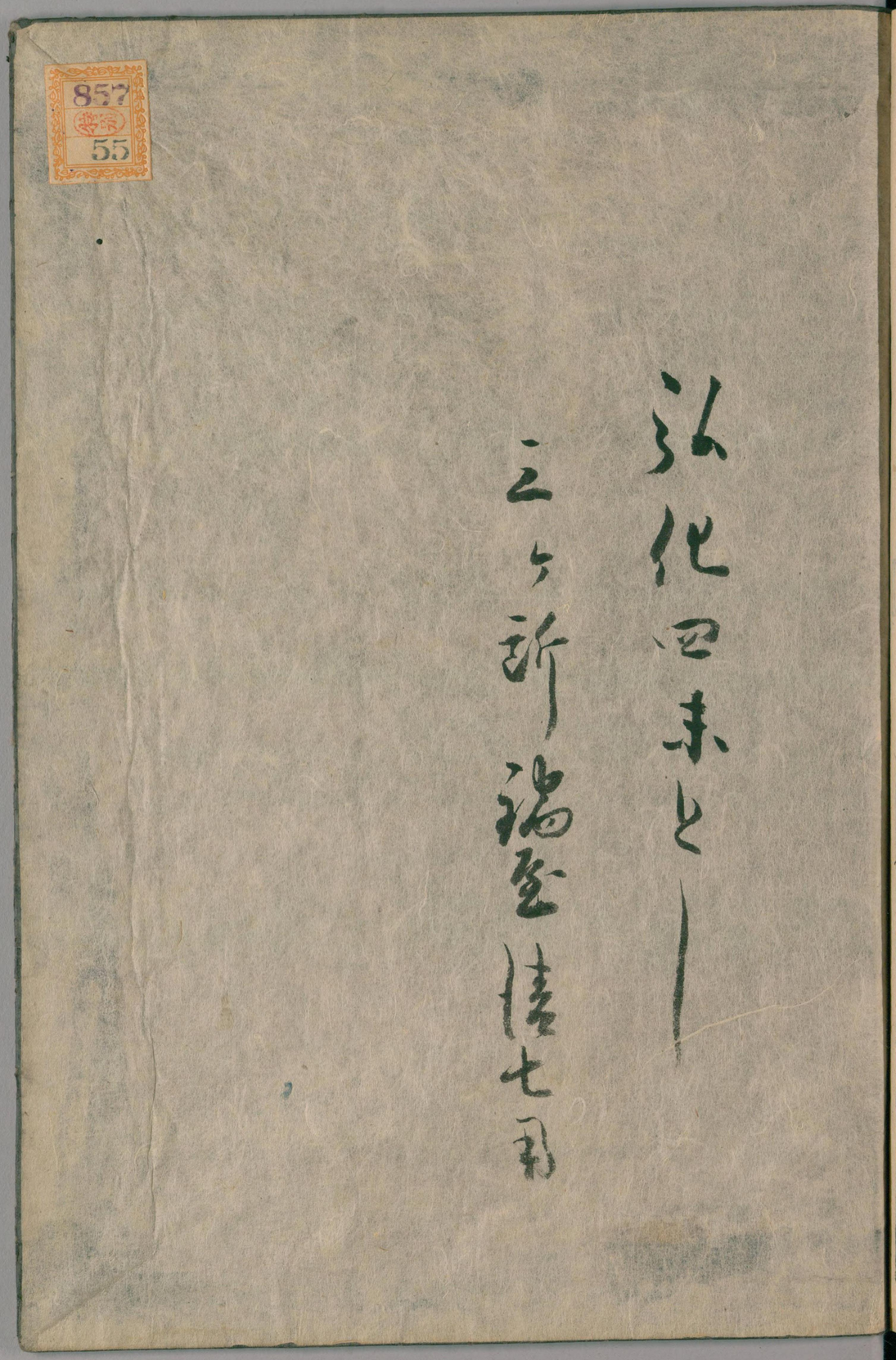
六十九 何ふまでくの乃かたるんとてまきこ
間りしかふところるまうり
よろん人志しす

七十 かくしんまでそ今ハ何こなれ是なくハ
わするし時とゆしまし物を

六十九 何ひのつまとおりんえ間まうふ
ハ海なるによりそへて業を海のも
ろうまきより

七十 相ハ仇なり宝書の説あるこ
なれとよむをまして仇とそしへん
るすゝひかしこ云こあぐとよこそ
仇のんをふくむへしこゝ為氏人ハ
あぐとよむのこなくどんすもあぐ
なりんは用へしこ云云

857
55



国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『古今和歌集』　請求記号 857-55
ガラス使用